

古フランス語における単純過去の半過去の使用の由来

町田 健

(Ken MACHIDA)

0. 本稿の目的¹⁾

単純過去が半過去とほぼ同等の価値をもって使用される場合がしばしばあることが、古フランス語に特徴的な現象であることはよく知られている。²⁾ 本稿では、この現象の発生の原因を、動詞の意味する動作の様態及び古フランス語のテキスト中の時制使用上の傾向という観点から考察していくことを目的とする。

1. フランス語の直説法時制体系と単純過去・半過去

文語だけに範囲を限れば、フランス語の直説法の時制体系は、その歴史を通じて、基本的には変化していない。³⁾ 従って単純過去と半過去の時制的機能も、現代フランス語と古フランス語で変わることはない。このことから、問題としている現象の原因は、時制体系そのものの変化に帰することはできず、別の観点から考察する必要のあることが分る。

そもそも動詞の時制というのは、句構造規則によって深層構造ですでに生成されている要素なので、特別の統語的条件が指定されていない限り、⁴⁾ 原則としてあらゆる文の動詞に、あらゆる時制を与えることができる。従って、ある時制形が他の時制形の機能をも担うという場合には、単一の文ではなく、複数の文の集合の中での時制使用を問題としなければならないのではないかと予想される。この側面、つまりテキストの中での時制形の果たす機能という観点から、フランス語の単純過去と半過去の機能を考えてみよう。

直説法時制体系中で、この2つの時制のもつ機能は、「過去・非未来・非完了」という点で一致しており、両者を区別するのは時制的素性ではない。それでは何によって区別されるのかというと、いわゆる「アスペクト」、つまり話者の事象の見方によってである。多くの文法書では、単純過去が瞬間的行為を表示し、半過去が継続的行為や状態を表示すると記述されているが、実際には、事象の容観的継続時間が時制を決定するのではなくて、⁵⁾ 事象を話者がどのように眺めているかが時制選択の基準となっている。Comrie(1976)に従えば、話者が事象を全体としてひとまとめに眺めている場合には perfective なアスペクト形、つまり単純過去形が、話者が事象をその内部の様態 (internal constituency) に注目して眺めている場合には imperfective なアスペクト形、つまり半過去形が用いられる。言い換えれば、2つの時制形は、事象が開始してから完了するまでの時間的区間の提示のし方を異にするのであり、単純過去はこの区間を、ある明確な時間的幅を備えた一様な連続体として提示し、半過去はこの区間を構成する各時点を、変異をもち、時間的幅も不明確な、不連続体として提示する。従って同じ継続的時間をもつ事象でも、単純過去で記述されると一瞬にして終わったかのような印象を与え、半過去で記述されると、分解写真を連続して見せられた後のように、長い時間継続したかのような印象を与えるのである。

さて、これらの時制形がテキストで使用される場合、単純過去は事象を明確な時間的幅をもつものとして提示することから、時間的に移動する事象（以下「事象1」と記す）を記述するのに適し、半過去は、その提示する事象の時間的幅が不明確なことから、時間を移動させない、背景的事象（以下「事象2」と記す）を記述するのに適していることになる。⁶⁾ このことから、単純過去が半過去の的に用いられているという場合には、事象2を記述するのに前者が用いられていることが意味されていると考えることができる。次の例を見てみよう。

(1) *ele prent contié a Aucassin, si s'en va tant qu'ele vint au mur del castel. Li murs fu depeciés, s'estoit rehardés, et ele monta deseure, si fist tant qu'ele fu entre le mur et le fossé.*

(Aucassin et Nicolette, XVI)

(*elle prend congé d'Aucassin et s'avance jusqu'à ce qu'elle parvint au mur de château. Le mur était dégradé, mais avait été pourvu d'un échafaudage sur lequel elle monta et fit tant qu'elle fu entre le mur et fossé. trad. par G. Cohen*)

(*elle*) prendre congé – aller – venir という事象は時間的に継起しているが、*le mur être dégradé* という事象は、*venir* の後に生じたものではなく、*elle venir* の時点ですでに存在していた状態であり、従って時間を移動させない。現代フランス語の時制使用の原則からいうと、上に述べたように半過去が予想される場所であり、実際下の現代語訳では半過去が用いられている。

2. 動詞の分類と過去時制

Vendler (1967)は動作の様態に注目して、動詞を 1. States 2. Accomplishments 3. Activities 4. Achievements の4種類に分類している。この分類では、この4種はそれぞれ独立した位置を占めているが、事象の時間的幅の明確性という基準に注目して分類し直すと、大きく1.状態 (States)と2.非状態 (Accomplishments, activities, Achievements) の2種に分けることができる。状態動詞に関していえば、例えば文(2)のような場合、いつから Jean がラテン語ができるようになったかは明確でないし、いつまで覚えているかも定かではない。従ってこの文の表示する事象の時間的幅は本質的に不明確である。

(2) *Jean sait le latin.*

ところが文(3)~(5)は、その意味する事象が、ある時点で開始し、ある別の時点で完了したことを含意しており、(3)、(4)については、必要ならば事象の継続時間を言語的に明示することができる(5)の事象は、物理的には継続時間が存在するが、日常時には瞬間的に完了するものとして受け取られているので、特別に強調する場合以外は、継続時間を明示することは通常ない)。

(3) *Paul marche (pendant une heure).*

(4) *Marie peint un tableau (en une semaine).*

(5) *François trouve un livre.*

このように非状態動詞の表示する事象は、その時間的幅を明確に表わすことができるということを前提としている。⁷⁾

次に、この動詞分類とアスペクトとの関係を考えてみよう。非状態動詞に単純過去形が与えられる場合、事象には明確な時間的幅が与えられるが、その区間内の個々の時点における動作の様態は無視され

る。テキスト中に置かれた場合には、時間を移動させる機能をもつ。一方この動詞に半過去形が与えられた場合には、事象の時間的幅は不明確なものとして提示され、時間的幅が実は明確に存在するという事は、付随的に含意されているに過ぎなくなる。その代りに、事象が継続している区間内の個々の時点における動作の様態の方に関心の焦点が移ってゆく。テキスト中では、時間を移動させる機能をもたない。

ところが、状態動詞はもともと継続区間内の様態の変異に乏しいし、時間的幅も不明確なことから、単純過去・半過去のいずれの時制形が与えられてもその意味するところは変わらない。なぜなら、半過去形を与えても、区間内の個々の時点における動作の様態には変化が与えられないし、単純過去形を与えても、事象に明確な時間的幅を定めることができないからである。テキスト中にある場合には、この明確な時間的幅の欠如ということから、いずれの aspekt 形も時間を移動させる機能をもたない。⁸⁾ 従って、状態動詞の単純過去形は、非状態動詞の場合と異なり、半過去形と同様の機能をもつことになる。このことから、現代フランス語でも次のように、半過去形の予想されるところに単純過去形が用いられている例が存在する。

(6) Guillaume de Machot *fut* le chef d'école reconnu par les poètes du XIV^e siècle. Il était clerc, et *fut* aumônier et secrétaire de Jean de Luxembourg, roi de Boême. (Poètes et Romanciers du Moyen Age, Pléiade, p. 955).

(7) L'auteur de ce « jeu » ne s'efforça pas seulement de rester le plus près possible du texte sacré... Il *eut* aussi le désir de donner à ses personnages les pensées et les sentiments des ordinaires humains. (ibid. pp. 4-5).

また、俗ラテン語、他のロマンス語もフランス語と同様の時制体系を備え、動詞分類も類似していると考えられるので、同様の例が存在することが予想されるが、実際、各言語の単純過去形に相当する形が、半過去形に相当する形の占めるべき位置に現われている例が、以下のように見うけられる。

(8) quae Ramessen ciuitas nunc campus est, ita ut nec unam habitationem habebat. Paret sane, quoniam et ingens *fuit* per girum et multas fabricas habuit. (per. Aeth. VIII, 1)

(このラマッセンという町は、今は野原になっていて、人の住処は1軒もなかった。面積は広大で、建物も数多くあったことが確かに窺える)

(9) zo ket *adbe* em propietate, / tuttu dede em caretate (Ritmo su Sant' Alessio, 224-25)

(身につけて持っていたものはすべて人に施した)

(10) Entom se saíu Lançolot do paaço e sobio em seu cavallo e a donzella em seu palafrem, e *forom* com a donzella dous cavaleiros e duas donzellas. (Lançalot, in Bec (1970) tome I p. 363)

(それからランスロは宮廷を出、自分の馬に乗り、乙女も自分の馬に乗った。乙女とともに2人の騎士と2人の侍女がいた)

しかし、注8でも指摘したように、状態動詞といっても、意味的には開始点の含意されているものも多いので、単純過去形でその開始点を明示する文も存在する。このため例(6)の (il) *fut* aumônier は、この文脈の中に存在しなければ、(il) *devint* aumônier の意味も持ちうる。Être という状態性の最も強い動詞に関してすら、aspect 的にこのような曖昧性があるのだから、これ以外の状態動詞の単

純過去形にも同様のアスペクト的曖昧性が存在することは言うまでもない。更に、テキスト中で、事象 2 の記述には、非状態動詞であれば常に半過去形が使用されるのだから、このような事象の記述に、頻度においてはそれほど劣ることのない状態動詞に関して、⁹⁾ 単純過去形が多用されるとしたら、それはテキスト中の時制使用の整合性を混乱させる結果となる。これは、上に述べたアスペクト的曖昧性も加わって、テキストの表示する時間の流れを伝達する効果を妨げるという害をもたらすことになる。恐らくこのような理由から、現代フランス語や他のロマンス諸語において、事象 2 に状態動詞の単純過去形を使用する例が稀なのであろうと考えられる。

4 古フランス語状態動詞の単純過去

4.1 古フランス語は動詞の分類や時制体系の点で現代フランス語と大きな隔たりはないので、状態動詞の単純過去は、理論的には事象 2 に用いることができる、言い換えれば、半過去の的に使用することができる。しかし前節の最後に述べたような理由で、その頻度は抑えられるはずである。ところが実際は、このような単純過去の頻度が、現代フランス語や他のロマンス語と比較して、古フランス語では非常に高くなっており、それに比例して半過去の頻度が低くなっている。例えば 12 世紀古フランス語の韻文作品である「ニームの輜重」(Le charroi de Nîmes) には、¹⁰⁾ 半過去の単純過去が 43 例あるのに、半過去は 29 例に過ぎない。これに対し、古イタリア語の作品「聖アレクシス伝」(Ritmo su Sant' Alessio) 中、¹¹⁾ 半過去の単純過去は 7 例のみで、半過去は 82 例、また古スペイン語の「わがシッドの歌」(Poema de mio Cid) 500 行中では、¹²⁾ 半過去の単純過去 4 例に対し、半過去 71 例であった。このように、古フランス語の作品に関して特徴的な点は、半過去の単純過去の使用そのものではなく、その頻度が他に比して非常に高いという点である。この原因は、テキスト中の時制使用に何らかの関係があると思われるが、次に、具体的なテキストについて詳しく検討してみよう。

4.2 「聖アレクシス伝」「ロランの歌」の時制の分析

Ménard (1976) によれば、¹³⁾ 古フランス語で単純過去の半過去の使用が特徴的な形で観察されるのは 11 世紀までで、12 世紀、特に Chrétien de Troye 以降は、その用法は衰退していくとされる。この現象の原因を探るといふ目的に添うためには、従って、11 世紀以前の古い時期のテキストについて調査する必要がある。また主として過去時制の使用傾向が問題となっているので、物語風のもので、展開に富んだものが望ましい。こういった観点から、「聖アレクシス伝」¹⁴⁾と「ロランの歌」¹⁵⁾を選んだ。ここではまず前者の時制使用について分析を試み、その結果から問題の現象の原因を推論し、この推論が後者についても妥当であるかどうかを検証するという方法をとる。

4.2.1 「聖アレクシス伝」には半過去が 26 例、単純過去は 201 例あって、そのうち半過去の単純過去は 34 例である。上述のように、半過去の単純過去の用例を提供しているのは、*estre* や *avoir* といった、状態性の強い動詞である。

(11) *Si fut un sire de Rome la citet* (13)

(ローマの都の貴族がいた)

(12) *Fud la pucella nethe de (h) alt parentet* (41)

(その娘は高貴家の出であった)

(13) *Li uns Acharies li altre Onories out nom* (307)

(1人はアカリエス、もう1人はオノリエスという名だった)

この半過去の単純過去の分布で特徴的なことは、これが2例を除いてすべて地の文に現われているということである。地の文は、3人称を中心に、過去の時点基準とした叙述だから、Benveniste (1966) のいう *récit historique* にあたる。「ロランの歌」でも、また時代が少し下った「オーカッサンとニコレット」や「ヴェルジ城代夫人」においても、半過去の単純過去は地の文にしか用いられていないので、この用法は *récit* に特徴的な表現形式に属するものであると思われる。

これ以外にも、時制使用に関して、地の文と会話の文、つまり *récit* と *discours* で様相を異にしている点がある。それは、単純過去または半過去と同じ機能をもった現在形(いわゆる歴史的現在)と、単純過去と同じ機能をもった複合過去の使用である。前者は全部で 例、後者は33例である。会話の文にも当然現在及び複合過去の形態は存在するが、これらはすべてその時制形本来の意味で、つまり発話の時点と直接的関連を備えている事象を記述するために、用いられている。

以上のことから、*récit* における半過去の単純過去の出現は、歴史的現在及び単純過去の複合過去の存在と何らかの関係をもっているのではないかということが予想される。特に前者は頻度が極めて高いことから、この頻度の高さが、半過去の単純過去の頻度の高さに影響を与えているのではないかと思われる。

3者の関係を調べる前に、地の文中の半過去17例の現われる環境を調べてみよう。統語的には、主文中に5例、従文中に12例ある。これらの従文を支配する主文のうち、その時制が単純過去であるもの8例、接続法半過去であるもの1例であった。古フランス語は、歴史的現在の多用からも窺えるように、「時制の一致」という現象は全く存在しないといってもいいくらいなのだが、それが顕著なのは単文が連続している場合であり、¹⁷⁾ 主-従という構造の文で、主文の動詞が過去時制であって従文の動詞が現在時制であるのは6例と予想したほど多くないのに、主文も従文も現在形であるのは23例もあるのだから、複文においては時制の一致は比較的守られていたものと考えられる。主文が過去時制である、上の従文中の半過去9例も、この時制の一致によって現われているものであろう。次に、主文にある半過去5例中、*estre* が4例、*avoir* が1例なのだが、これは以下の例のように、いずれも、一時的な存在・所有・状態といった、可変的な事象の記述であるという共通点をもっている。

(14) *Sainz Innocenz ert idunc apostolie* (301)

(聖イノセントが当時は法王であった)

(15) *Sainz Boniface, que l'um martir apelet, Aweit en Rome un'eglise mult bele.* (566-67)

(殉教者と呼ばれる聖ボニファスは、ローマに非常に美しい教会をもっていた)

これに対して、地の文中の半過去の単純過去32例のうち、*estre* と *avoir* の単純過去は、前に挙げた例文(14)~(16)のように、いずれも出身・名前といった不変的な事象の記述であり、しかも1例を除いてすべて主文にある。

以上の事実から、半過去の現われることのできる環境が、統語的(主文の時制が過去である時の従文中)、あるいは意味的(可変的な過去の事象)に限られる傾向が強かったことが分る。ところが、この環境にあれば時制は必ず半過去になるというのではなくて、この同じ環境で歴史的現在が用いられている例が14ある。更に、この環境以外の事象2についてだと、歴史的現在形の頻度は半過去形のそれ(3例)を圧倒しており、31の用例が観察される。このように現在が半過去の領域に大幅に進出して

いるのは、現在という時制は、発話の時点で存続している事象を記述するのだから、事象を構成する各時間点の変異を提示することになるのは当然で、このためアスペクト的には半過去と同質であるためだろう。¹⁹⁾ 上述のことから、ある限られた条件を除いては、またその条件においてさえも、事象 2 の記述に際して半過去の使用を抑制しようという傾向が、このテキストにあったということが推論できる。その上、現在は自身とアスペクト的に対立する別の現在時制形と相補関係にないので、動詞の意味する動作の様態が本質的にもつ時間的幅の限界によって、事象 1 に対しても適用されることができる（201 例が作品中にある）。この結果、非完了の事象に対して使用される時制は、頻度の点で、現在と単純過去が圧倒的となり、事象 1 と 2 の区別も、現代フランス語のように形態的に区別するのではなく、文脈に委ねるといふ傾向が強くなる。これを更に進めて、すべての事象に現在形を与えることも可能だが、そうするとそもそも「過去」の話であることが分らなくなってしまいし、その上、事象 1 と 2 の区別をすべて文脈の手に委ねるのは伝達の効率上非常に不都合である。この不都合が生じないようにするためには、現在形に比べて単純過去形の数になるべく少なくならないように保っておくことが必要であり、実際、上にも挙げたように、単純過去形の頻度は現在形の頻度の 75% 程度である。

時制使用の傾向が上述の状態である場合、不変的事象 2 が主文で表現されると仮定しよう。不変的事象はそもそも時間的幅が最も不明確で、各時間点の変異も極めて少ないので、これに与えられた単純過去形と半過去形は意味するところがほぼ同じである。その上、上に述べたように、この条件では半過去が最も現われにくいので、現在形か単純過去形が用いられることになる。この場合どちらを用いてもよいのだが、可変的事象 2 が主文にある場合、これを単純過去で表示すると時間の移動に関して曖昧性を生ずるので、現在形を用いる傾向が強い（現在 39 例に対し単純過去 3 例）ことから、上述のようにテキスト中の単純過去の頻度になるべく低くならないように保つ配慮が働いて、このような主文にある不変的事象は単純過去で表示されることが多くなるであろう（単純過去 11 例に対し現在 3 例）。また従文にあっても不変的事象であったり、可変的事象でも、例えば神に対する愛のように、変化する傾向が弱いと考えられる場合には、時間を移動させることにならない限りは、単純過去を用いることが可能である。このような過程を経て、地の文中の半過去の単純過去の頻度が高くなったのであると考えられる。

次に、歴史的現在と単純過去の複合過去との関係についてみてみよう。古フランス語の複合過去は、discours 中では、例外なくこの時制本来の意味、つまり現在に対する完了形として用いられている。²⁰⁾ 従って基本的にはこの時制は未だ現在時制に属していたものと見なすことができる。しかし統語的観点からすると、複合過去に限らず古フランス語の複合時制は、単一の動詞時制形態として十分に確立していなかった。言い換えれば、avoir / estre と過去分詞の結びつきがあまり強くなかった。これは次のような例から窺うことができる。

(16) *at li emfes sa tendre c[h]arn mudede!* (116)

（少年は自分の華奢な身体を何と変えてしまっていたことか）

(17) *Quer tuit en unt lor voiz si atempredes* (593)

（なぜなら皆は声を潤ませていたから）

(18) *sa raison li a tute mustrethe* (71)

（自分の言うべきことをすべて彼女に言った）

いずれも過去分詞は目的語に性数格を一致させており、過去分詞は、avoir と一体となって1つの時制形を形づくっているというよりもむしろ、目的語を修飾して、これと名詞句を構成しているかの観がする。また *estre pp* という構造の場合には、次の例が示すように、過去における事象の現在に対する影響よりも、現在における状態の方に力点が置かれる傾向にあった。²¹⁾

(19) Tu m'ies fuit, dolente an *sui remese* (132)

(お前は私のもとを去って、それで私はつらい思いをしている)

(20) Si grant dolor or m'est *apar[e]üde!* (409)

(とても辛い苦しみは今私の前に現われている)

このように、複合過去形においては、助動詞 avoir や *estre* の本来の語彙的意味が依然として強く意識されていた訳で、これに比例して「完了形」としての時制的意味もあまり強くなく、過去の事象よりもその結果である現在の状態の方にむしろ比重があったものと考えられる。²²⁾ このような場合、過去における、完了という素性をもたない事象を記述するのに、歴史的現在と同様の意味をもつものとして、*récit* 中で複合過去形が用いられることができたろうということは想像に難くない。ただし、全く現在形と同じ意味をもっていたのではないということは当然で、そもそも非状態動詞の過去分詞は、本質的に動作の様態の変化を意味特徴としてもっているもので、テキスト中に用いられる場合は、事象1の記述に与えられるのが専らであった。逆に状態動詞の場合は、過去分詞が時間的変化を意味しないので、事象2に用いられた。

これまで見てきたように、地の文と会話文の時制的様相の相違の主たる要因となっているのは、前者にのみ見られる歴史的現在の使用で、この頻度が高いことから、同じく地の文に特徴的な半過去の単純過去や単純過去の複合過去が導き出されてくるのだという推論が導かれてきた。次には、この推論の正当性を実証するために、ほぼ同時期の作品とされている「ロランの歌」の時制使用を検討してみよう。

4.2.2. 「ロランの歌」1000行中の時制使用の傾向も、「聖アレクシス伝」のそれと同様であった。半過去はわずか7例しかないのに、半過去の単純過去は約5倍の37例あった。

(21) *Blancandrins fut des plus savies paiens* (24)

(ブランカンドランは最も賢い異教徒の1人であった)

(22) *Gent out le cors et les costez out larges* (284)

(上品な身体つきをし、腰の幅は広がった)

(23) *Un faldestoed i out d'un olifant* (609)

(象牙でできた玉座があった)

しかも、この種の単純過去は2例を除けばすべて地の文中にあり、会話文中の2例(208、306行)も、厳密に言えば *récit historique* に属する。これを導く原因となっていると思われる歴史的現在は全部で254例あり、予想通りすべて地の文中にしか現われていない。うち事象1に用いられているのが145例で、事象2には109例が用いられていた。事象2に用いられた半過去は7例しかなかったのだから、いかに現在が半過去の領域を侵しているかが分る。このように「ロランの歌」では「聖アレクシス伝」にも増して半過去の使用が抑制される傾向が強いので、「聖アレクシス伝」では概ね不変的事象に対して用いられていた半過去の単純過去が、ここでは、例(23)が示しているように、可変的事象にも用いられており、頻度としてはこちらの方が高い(26例)。

さて、我々の推論に従えば、上の現象は単純過去の複合過去が存在を予想させる。実際このテキストには69例が観察され、これもすべて地の文中に分布している。またこの種の複合過去を導くもう一つの条件であった、avoir / estre と過去分詞の結びつきの弱さも、次の諸例が示すように、明確に認められる。

(24) Li reis Marsilies *ad la colur muee* (441)

(マルシル王は顔を変えた)

(25) Devant Marsilie *ad faite sa vantance* (911)

(マルシル王の前で自慢話をした)

4.3 2つのテキストの検討によって、古フランス語において、半過去の単純過去の頻度が高いのは、歴史的現在の頻度が高いことと密接な関係があることが明らかになったと思う。今度は逆に、歴史的現在の頻度が低ければ、半過去の単純過去の頻度が低くなることが予想されるが、これも実際そうである。例えば、古イタリア語で書かれた「聖アレクシス伝」中、歴史的現在は23例しか用いられておらず、これに比例して、半過去の単純過去も7例しか見られないし、単純過去の複合過去も2例のみである。これに反し半過去は82例もが存在する。

5. 歴史的現在の由来

半過去の単純過去の頻度を高める直接の契機となったのは、歴史的現在の頻用であったが、真の原因を明らかにするには、更に、古フランス語でどうして歴史的現在の頻度が高かったのかを説明せねばならない。しかしこれは高度に文体的な問題であり、恐らく言語外的な要因が強く作用していると思われるので、解明するのは非常に困難であり、筆者の手に余る。ここでは概略の問題点を述べるにとどめ、詳細は今後の研究に委ねることとする。

古フランス語の歴史的現在の使用を、Foulet (1920) は国語の慣用に由来するものと考えているが、²⁴⁾これは事実であるかどうかは疑わしいように思われる。なぜなら、「聖アレクシス伝」や「ロランの歌」では、会話文中の歴史的現在はまれであったし、「オーカッサンとニコレット」の散文の部分でも、会話文には歴史的現在は現われていない。従って、これはすぐれて文語的な手法だということになる。この文語的であるという特徴が、ケルト語基層という考えを排除する。その理由は、ローマに支配されたケルト人は、下層階級を構成していたのであって、文語を形成する力はなかったからである。またもしケルト語基層の影響によるのならば、ケルト人の居住地域であった、北イタリアやポルトガルにもこの現象が見られるはずだが、この地域の古い資料には観察されない。²⁴⁾ また古プロヴァンス語や古フランコ・プロヴァンス語にも同様の現象が見られ、²⁵⁾ その上、この当時のゲルマン語である古高ドイツ語や古英語には歴史的現在は使用されないことから、²⁶⁾ゲルマン語上層の影響も考えられない。これ以外には、古典ラテン語の影響が考えられる。確かに、「聖アレクシス伝」や「ロランの歌」の作者は、ラテン語の素養があったはずの僧侶であったろうし、古典ラテン語における歴史的現在は、特に詩において特徴的であった、²⁷⁾ という事実は古典ラテン語が原因であるという考えを実証するかのようである。しかし、同じ文化的背景をもつ僧侶によって書かれた、古イタリア語の「聖アレクシス伝」に歴史的現在が少ない、という別の事実が上の考えに対する反駁となる。

6. 結 び

古フランス語の時制使用上の特徴である、単純過去の半過去の用法は、まずその頻度の高さが特殊なのであって、用法そのものではなかった。その原因として最も有力であると思われたのは、歴史的現在の頻用であり、これは、もう1つの特色である、単純過去と同じ機能をもつ複合過去の出現をも説明することができた。今回は歴史的現在の起源をも求めることはできなかったが、これには基層や上層、あるいはローマ文化の伝承といった言語外的要因が深く関わっていることが予想される。

注

- 1) 本稿は1984年5月19日に名古屋で行われた第20回日本ロマンス語学会で口頭発表したものをまとめたものであるが、一部の内容は別の拙論(“The regression of the Passé Simple in Old French”(言語学演習’83))のものと同様のもので、重複しない部分のみを論文とした。
- 2) Foulet (1928) §325, p 222, Gamillscheg (1957) §91, p 398, Ménard (1976) §146, p 139
- 3) フランス語の直説法時制体系を、「過去—非過去」, 「未来—非未来」, 「完了—非完了」という二項対立を基準として記述すると下図のようになる。

	過 去			非 過 去	
	非 未 来	未 来	未 来	非 未 来	未 来
非 完 了	imparfait	passé simple passé composé	conditionnel	présent	futur
完 了	plus-que-parfait	passé antérieur passé sur-composé	conditionnel passé	passé composé	future antérieure

時代・地域によって個々の時制形態に変異な存在するが、その時制的機能はいずれも上の体系上の位置から説明することができる。

4) 例えば、 aussitôt que の後に過去時制を用いる場合、半過去や大過去は通常現われることができないなど。

5) もしそうであれば、瞬間的に完了する行為を示す動詞である mourir, trouver, embrasser 等には半過去形が存在しないはずだし、継続する状態を表わす動詞である être, rester, tenir 等には逆に単純過去形が存在しないはずだが、実際はいずれの種類動詞にも両方の時制形が存在している。

6) Weinrich (1973) pp. 112 - 117 ここでは単純過去が物語の「主要な」筋 (plan) を、半過去が「背景となる」筋を描くとされているが、2つの plan の区別の基準は与えられていない。筆者はテキスト中の過去時制使用の第一の基準は、このような主観的なものに求めるべきでなく、事象が時間を移動させるか否かという、むしろ客観的なものに求められると考えている。これを証明する事例が例(1)である。

7) 状態動詞と非状態動詞は、他にも、前者の示す事象の様態が、どの時点においてもほとんど変異を示さないのに対し、後者の示す事象の様態は、継続する区間のあらゆる時点において変異を示す、つま

りdynamicである、という意味的な区別が存在する。

Vöndler (1967) p. 99はrun という Activity の動詞に関して次のような記述をしている。「走っている人は、ある時点で右足を上げ、次の時点で下ろす、それからもう一方の足を上げ、そして下ろす等々」

なお、この動詞の分類は、厳密にはRohrer, Guenther (1978)の指摘する通り、動詞ではなく文のレベルで行わねばならず(同じ動詞でも目的語をとるか否かで属する種類が異なる)、しかも、ある文がどの種類に属するか、明確に判断できない場合も数多くある(cf. J'entends le chien qui aboie)。従って、状態動詞と非状態動詞の間には、連続的な段階が存在する。

8) 状態動詞でも、例えば savoir や devoir など意味的に開始点の明らかな事象を表示することのあるものは、単純過去形に置かれた場合、その事象の開始点が明示されることもある。

Tout Saint-Ouen *sut* l'accident en quelques minutes. (Zola, in *Petit Robert*)

(サン・ワンの者は皆数分でその事件を知った)

9) 例えば Balzac の “Le Cousin Pons” の最初の部分の定動詞 80 例について統計をとると、非状態動詞 55 例 (69%) に対し状態動詞 25 例 (31%)。なお状態動詞と見なしたのは、être, avoir, vouloir, devoir, sembler, paraître, penser, sentir。

10) 用いたテキストは、Pléiade 叢書、Poètes et Romanciers du Moyen Age (1952) 所収のもので、一部分省略がある。

11) テキストは、La Letteratura Italiana, Storia e Testi, volume 2, “Poeti del Duecento”, Milano 所収のもの。

12) テキストは、C. Smith 校訂で Oxford Univ. Press から出版されたものの序文や語彙集をスペイン語に翻訳したもの(1981)、Madrid

13) § 146, p139

14) テキストは、Sankt Alexium ed. G. Rohlf, Tübingen, 1968

15) テキストは、Das altfranzösische Rolandslied, ed A. Hilka, Tübingen, 1974 調査したのは全 4000 行中の最初の 1000 行分である。

16) Ménard (1976) §145, p 138 “Le présent historique . . . est très répandu en AF (= Ancien Français), notamment dans la littérature narrative”。

17) 古フランス語では、主文—従文という構造の文は、古典ラテン語や現代フランス語に比べて、現われる頻度が遙かに低いため、単文の連続という環境が極めて多い (cf. Ménard (1976) §198, p. 188)。このため、時制の不一致の頻度も、複文が多い場合よりも更に増大する。

18) 「可変的である」というのは、より厳密に言えば、ある文の動詞の主語の存続する区間と、その文が真である区間の長さが一致せず、後者が前者に含まれると解釈される、ということである。

(i) Il est Président des Etats-Unis.

(ii) Il est de race blanche.

(i)で、彼が合衆国大統領であるのは彼の一生のうちでたかだか4年ないし8年間であるが、彼が白人であるのは、生まれてから死ぬまで継続する。従って(i)は可変的、(ii)は不変的事象を記述していることになる。

19) 現在と半過去のアスペクト的同質性は、半過去が「過去における現在」(présent du passé)と定義されることがあるという事実にも反映されている (cf. Wagner et Pinchon (1961) §433, P361).

20) Yvon (1960) p.247

21) Ménard (1976) §149, p. 143, Foulet (1928), §113, p. 84

22) このことから、明確に過去の事実であることを示そうとして、次のように、一見前過去と全く同じ語形でありながら、実は単なる非完了の過去、つまり単純過去と同じ意味をもつ例も存在する (cf.

Ménard (1976) §149, p. 143).

E! filz . . . cum m'oüs enhadithe! (433).

(息子よ。お前は私のことをとても憎く思っていたのだね)

23) ex) Fors sul le lit, u il ad jeü tant, / Ne puet muer ne seit aparissant (274-75)

(長い間横になっていたベッドの上から出ていくことは、人目につくかも知れないので、できなかった)

An tant dementres cum il iloec unt sis, / Deseivret l'aneme del cors sainz Alexis (331-32)

(彼らがその場にいる間に、魂が聖アレクシスの身体から離れていった。

24) もっとも、古アイルランド語では、この歴史的現在、かなりの頻度で使用されたという記述がある (Thurneysen (1946) p. 329).

25) 「ボエシス」(Boesis) 193行中、半過去の単純過去13例、半過去12例、歴史的現在、事象に対し21例、事象2に対し34例、複合過去5例。「アレクサンダー大王伝」(Roma → Alexandre) 105行中、半過去の単純過去9例、半過去なし、歴史的現在、事象1に対しては例がないが、事象2に対して10例。

26) Dal (1966) p.134, 小野・中尾(1980) p.373

27) Kühner, stegmann (1976) II, p. 116

参 考 文 献

Beaujot, J.-P. (1980): Quand Passé Surcomposé et Passé Antérieur sont de parfaits synonymes . . .

Bulletin de Centre d'analyse du discours N° 4 pp. 81-122

Bec. P. (1970, 1971): Manuel pratique de philologie romane, tome I, II, Paris

Benveniste, E. (1966): Problèmes de linguistique générale, Paris

Comrie, B. (1976): Aspect. Cambridge

Dal. I. (1966): Kurze deutsche Syntax, Tübingen

Ducrot, O. (1979): L'imparfait en français, Linguistische Berichte vol. 60, p. 1-23

Elcock, W. D. (1960): The Romance Languages, London

Ernout, A., Thomas, F. (1953): Syntaxe latine, Paris

Foulet, L. (1920): La disparition du prétérît, Romania, 46, pp. 271-313

—— (1982): Petite syntaxe de l'ancien français, Paris Gamillscheg, E. (1957): Historische französische Syntax, Tübingen

- Guenther, F., Hoepelman, J., Rohrer, C. (1978) : A Note on the Passé Simple, in "Papers on Tense, Aspect and Verb Classification, Tübingen
- Hergot, L. (1981) : La place du Présent dans les récits de la Queste del Saint Graal, *L'information grammaticale*, N° 9
- Koller, H. (1951) : Praesens historicum und erzählendes Imperfekt, *Museum Helveticum* vol. 8, pp. 63-99
- Kühner, R., Stegmann, C. (1976): Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache, Darmstadt
- Mancarella, P. G. B. (1978) : *Linguistica romanza*, Bologna
- Ménard, P. (1976) : *Manuel du français du moyen âge*, Bordeaux
- 長神 悟 (1981) : 二つの「アレクシウス」 — 中世フランス、イタリアの聖者伝をめぐって — , 「ロマンス語研究」, vol. 13, 14, pp. 97-110
- 小野 茂、中尾 俊夫 (1980) : 英語学大系、英語史 I , 大修館
- Thurneysen, R. (1946) : *A grammar of Old Irish*, Dublin
- Togebly, K. (1980) : Romance historical morphology, in "Trends in Romance Linguistics and Philology, vol. 1, The Hague
- Sampson, R. (1980) : *Early Romance Texts, An Anthology*, Cambridge
- Schøsler, L. (1980) : (c.-r.) Tempora in Chrétien's 《Yvain》, *Eine textlinguistische Untersuchung* (Wigger, M.) *Revue romane*, XV-2, pp. 343-50
- Serbat, G. (1976) : Das Präsens im lateinischen Tempus-system, *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 90, pp. 200-21
- Vendler, Z. (1976) : *Linguistics in Philosophy*, It.
- Wagner, R. L., Pinchon, J. (1962): *Grammaire du français*, Paris.
- Weinrich, H. (1973) : *Le temps*, traduit par M. Lacoste, Paris
- Wunderli, P. (1976) : *Modus und Tempus*, Tübingen